

入所施設サポートの取組

① 宍原荘

(社会福祉法人 玉柏会) 6

② わらしな学園

(社会福祉法人 静岡市厚生事業協会) 15

① 宍原荘 (社会福祉法人 玉柏会)

▶▶ 宍原荘のご紹介

宍原荘では、6つのユニットによるケアを実施しており、画一的な支援ではなく、障がいのある方々それぞれが望んでいる暮らしをサポートすることを目指しています。

常に支援を必要とする方に対して、日中は、日常活動の支援や生産活動、創作活動の機会の提供、及び身体機能回復や体力維持のために必要な支援を行っています。

また、買い物、外食、映画鑑賞や、年中行事、地域イベントへの参加など、その方の意思や希望に沿った時間が過ごせるよう支援しています。



▶▶ 宍原荘 施設長より

静岡市の本事業に参加して以降、4年間に渡り、水野敦之先生には毎回熱心な御指導をいただき、大変感謝致しております。基礎知識の習得や、数多くの現場でのコンサルテーションを通じて、自閉症支援のフレームワークの視点で思考する習慣が身につき、成果があがってきたことを実感しています。

当法人では、開始当初はコアメンバーと称する8名の職員が集中して学習し、理解を深めてまいりましたが、この手法を多くの職員が習得できるよう、第2ステップとして平成31年3月に「自閉症研修チーム」を発足させました。このチームはコアメンバーにて構成され、その目的は、彼らが得た知識や技能を広く法人内に展開し、多くの職員の自閉症支援の専門性を高めることにあります。

現在、宍原荘内を始め、法人内の他事業所においても内部研修を重ねており、理解が徐々に深まってきました。これからも研修を継続し、より多くの職員が支援の専門性を高めていくことが、地域のご利用者の「自立」に一步一步つながっていくのだと思います。今後とも、わらしな学園様とも切磋琢磨しながら、専門性を高め、ご利用者の質の高い生活づくりを目指していきたいと考えています。

▶▶ 入所施設サポートを受けたきっかけ

平成27年2月、宍原荘に対して、知的障がい児入所施設から強度行動障がいがあるAさんの受け入れをお願いしたいと打診がありました（児童福祉法の改正により）。

当時の宍原荘では、平成7年の増床時に自閉スペクトラム症を伴う知的障がいがある方が入所され、強度行動障がいがある方もいらっしゃったものの、昔ながらの集団支援が主で、個別の特別な支援は行っていませんでした。

Aさんの受け入れについては、1年後の入所を目標としました。

まずは、Aさんに宍原荘の様子や日課を知っていただくため、来荘し、体験してもらうことになりました。

初回、活動後に昼食として外でラーメンを食べるという楽しみを目的にもって、Aさんと児童施設職員が来荘しました。

しかし、宍原荘に入る玄関前でAさんは不穏になり、落ち着けるよう一度バスに戻りました。（タイムアウト）

その後、児童施設での取組として行っていたホワイトボードを利用して指示をし、Aさんは、グラウンドを何周か歩きましたが、途中で再び不穏になり、支援途中で帰ることになりました。

この状況を体験して

- ➡ **これまでの支援方法では対応できないのではないか？
強度行動障がいがある方への対応を今後どうしていったら？**
- ➡ **今までの支援方法だとご利用者に待っていただく時間が多いので、
活動がもう少しあっても…**
- ➡ **自閉スペクトラム症があるご利用者へ、予定変更などの説明を混乱なく
伝えるにはどうしたらいいのかわからない**

という不安が出てきました。

そこで、誰か専門的に自閉スペクトラム症を支援されている方に教えてもらえたら良いのではないか？

と、コンサルタントを紹介していただくことになりました。

自閉症教育・支援コンサルタント 水野 敦之 氏

▶ コンサルテーションの流れ

最初の1年目は、

- ① **コンサルタントに実際の支援状況を説明しながら、アドバイスをいただくこと**
- ② **基本的な自閉スペクトラム症及び強度行動障がいについての基礎知識を講義形式で教えていただくこと** を進めました。

2年目からは、次の6つの手順でコンサルテーションを進めていただきました。

① アセスメント

ご利用者・対象者を知ることから学びました。

アセスメントは、ご本人が持っているスキルを支援者が適切に知ることです。

実際に目の前でコンサルタントがご利用者をアセスメントしている場面を見ることができました。アセスメントの中で当時スタッフも知らないご利用者のスキルが表れ、ただただ驚きでした。

② 障がい特性を学ぶ

「障がいは脳の機能障がいに起因するもの」と捉え、多様な行動は障がい特性によって引き起こされるものと、機能的に捉えることが基本になります。

コンサルタントから障がい特性を細かく教えていただきました。実践を通じた事例も多く教えていただき、支援者としてはとてもわかりやすかったです。

③ ワークシートを活用した実践

フレームワーク※4の核となる部分、「フレームワークシート」をスタッフ全員で共有することで一貫した支援を目指しています。コンサルテーションを受けてからはシートを活用して支援の組み立てをしています。

④ 実践発表

コンサルテーションではご利用者に対する実践をフレームワークシート+動画で発表します。サポート事業を受けている事業所は全て同じシートを活用しているので、参加者全員が理解できる内容になっています。

⑤ 評価

実践に関してコンサルタントから評価していただきます。シートの書き方や視点の持ち方、指示の出し方、指示カードのサイズなど細かい点についてもアドバイスしていただけます。

⑥ 再構造化

コンサルタントからのアドバイスを参考に、支援の再調整を行います。これを再構造化といえます。コンサルテーションでは以上の流れを繰り返し行い、支援の底上げを目指します。

※4 **フレームワーク** フレームワークを活用した自閉症支援:書籍「フレームワークを活用した自閉症支援」(水野敦之著・エンパワメント研究所)を参考にした支援。

▶ コンサルテーションの様子

最初は、コンサルタントの説明がよくわからない職員もいましたが、

- ① **アセスメント**を通してご利用者のできること・わかっていることを探る
- ② **アセスメント結果**から課題やスケジュールを作り、**実際**にご利用者に教える
- ③ **活動に取り込む** ということを進めていくことで、施設の中の構造化が進み、ご利用者が落ち着いて過ごせるようになっていきました。

《構造化の評価の場面》



机をこんな形にすると
支援しやすいよ

《取組の説明の場面》



この活動を他の方が気にならない形で
取り入れています

《講義の場面》



ご利用者への指示をするとき、
どの手がかりを使ってわかって
もらえるようにしますか？

《視覚的構造化の講義の場面》

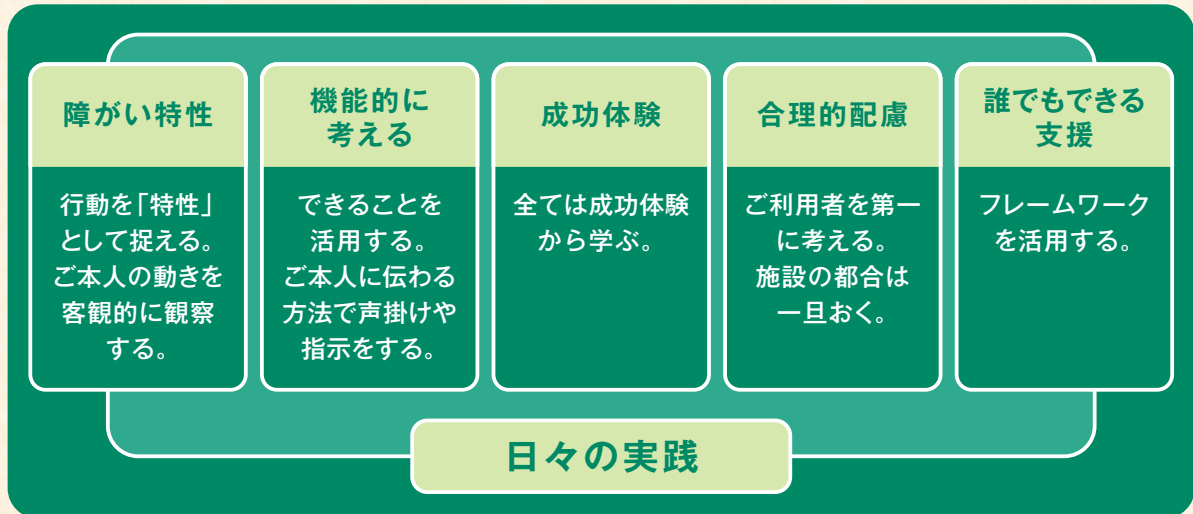


《コンサルタントが作成したアセスメント材料》



▶ コンサルテーションから学んだ視点

コンサルテーションを通して、次の5つの視点をもって日々の支援を実践していくことが大切だと実感しました。



実行することによる効果・変化したこと

○ 活動を豊富にすることで他害行為が減る→他のご利用者も安定。

周囲のわからないことへの不安から生じる他害行為が減り、ご本人も他のご利用者も安定しました。

○ ご利用者の自立を体感できた→支援者が楽になった。

ご利用者が自立をすることで支援する量が減りました。また、自分の支援でご利用者が自立する嬉しさも見つけられました。

○ まずはじめないと、何も変わらない。

頭の中で考えていても何も進みません。まずはやってみる、という支援体制ができました。

○ 障がい特性を機能的にみられるように変化→虐待防止に繋がる。

何でもできるようにさせよう・こうでなければならないという気持ちを抑えて支援していくことができるようになりました。

○ 過度な支援はしない（クールな声掛け、依存しない・させない）。

ご本人がわかりやすい指示を心がけることで、余計な指示出しでご本人を混乱させてしまうことが少なくなりました。ご本人も見通しが立ちやすくなり、ご自身で行動できることが多くなりました。

▶ 具体的な取組の紹介（コンサルテーションでの学びからの変化）

コンサルテーションを通して、実際に支援がどのように変わったのか、取組の一部をご紹介します。

1 アセスメントからはじめる

自閉症支援を組み立てていくにあたって、まずご利用者を「アセスメント」することが根付きました。



コンサルタントからは、日常の支援の中で観察して行う**インフォーマルアセスメント**を学びました。一貫性のある視点を保つため、宍原荘ではコンサルタントが作られた**フレームワークシート**を活用させていただいています。

2 環境の変化

以前はご利用者が**集団**で動いていました。

写真の様にご利用者に集合していただき、ひとつのスペースで活動をしていました。



コンサルテーションを受け、集団活動から脱却し、**個別活動**を意識するようになっていきました。個別の活動・場所を用意し、集中できるように間仕切りなどで環境を整えていきました。



3 見通しをもっていただくことを意識する

ご利用者が自分で気づいて、自分で実施する自立の基本をコンサルテーションで学びました。

今まで私達は「声掛け」のみの支援でしたが、ご利用者が理解できる方法でお伝えし、見通しを持っていただく「スケジュール」を作りました。

右の写真は「絵」で情報を理解される方へのスケジュールによる指示です。

上から下に活動が進んでいきます。例えば一番上の机のカードは「自立課題※5」を示します。ご利用者がこのカードをとり、活動場所へ移動します。



活動場所には、何種類もの自立課題が置いてあります。その棚の横には、実施する自立課題を示したカードが貼られています。

① 同じカードが貼られている下にスケジュールからとったカードを自身で貼ります。

② 実施する自立課題の順番を示しています。上から下に進めていきます。

③ 同じカードの自立課題をご本人が探し、カードをケースに貼り付けて自立課題スタートです。



このような活動を作る際には、ご本人が理解できるものを提示することに気をつけています。

アセスメントでは、ご本人が「**できること**」「**できたり、できなかったりすること**」「**できないこと**」を評価します。

自立課題を作る際には、**ご本人が「できること」を活用し、「できたり、できなかったりすること」を課題**にします。「できないこと」は課題にはしません。「**できないこと**」は**支援が必要な部分**です。

このようにコンサルテーションを通して、支援者は「**機能的**」に考えるようになってきました。

※5 **自立課題** 一人で取り組み、指示や支援を受けずに完成できる課題のこと。

▶▶ 支援に自信が持てるようになりました

コンサルテーションを受ける前、宍原荘の職員は、精神論で「みんなで統一した支援を目指そう」としてきました。

現在は**フレームワークの視点**で支援を行っています。

確固たる考え方を学ぶことは、ご利用者にとってはもちろんのこと、私達支援者にとっても良い効果があります。**支援に自信が持てます。**

共通したシートを作成し、共通した言語を使い、共通した支援に取り組む。

支援者全員がフレームワークシートや共通したアセスメント道具を活用することで、共通した意識や姿勢、また知識になっていると実感しています。

現在のやり方の方が、最終的に統一した支援になるのではないかな？と感じています。

当初はシートに記入して支援を展開していく文化がなく、正直抵抗がありました。たくさんシートを書いているうちに情報が整理されていくことに気づきました。

また、宍原荘においても改善していきたいことですが、担当制などがあると、ご利用者に対しての支援が、いつも同じ支援者というケースが多々あります。

支援計画は担当者が作り、他の支援者の意見が介入できない場面もあるため支援にばらつきがでてしまいます。

実際に経験しましたが、自閉症の方は人に対して強い依存傾向がある方もいらっしゃる。支援者を固定せず、できるだけ何人かの支援者で支援を行うようにし、共生を避けた方が良くと思います。

そのためにも、ご利用者を客観的にアセスメント、評価できるシートはとても重要だと思えます。

自閉症の方々に対しては必ず

いつ・どこで・何を・どのようなやり方で・どうなったら終わりなのか・

終わったら次に何があるのか を繰り返し考えていき、この情報を個別化して情報提示していくことの大切さと難しさを感じています。

宍原荘の支援を少しご紹介させていただきましたが、4年前の宍原荘と比べると、はっきり言えますが、支援の状況・環境は激変しています。

いま現場では支援に対して毎日話し合いながら支援の組み立てをしています。協議する内容は水野先生から学んだことがベースになっているため、考え方が統一されています。

とても支援しやすい環境です。

(宍原荘 職員の声)

▶ コンサルタント 水野 敦之 氏より

コンサルテーションを続けてきて感じる宍原荘さんの強みは、まじめさとポジティブさのように感じます。一貫した利用者の支援を目指す宍原荘さんは、コンサルテーションに入る前からも様々な研修で見よう見まねで構造化の実践をされていました。やれることはやるという視点で必要だったのは基本でした。どんなに構造化をしても基本がぶれるとうまくいきません。コンサルテーションを通して基本と実践を繰り返すことで普段の支援が変わってきます。宍原荘さんの強みに基本が加わることで利用者に良い影響（効果）をあたえ、そして関係のある支援者に良い影響を与えていると思います。

今後は、宍原荘さんが静岡市の様々な施設にとって「基本に基づく実践を学ぶモデル」であることも意識し、1つ1つのケースの取組を大切にしてほしいと思います。

< コンサルタントから助言を受け、宍原荘で作成した自立課題の一部 >

➡ 数字が書かれている瓶に同じ数字のボールを入れる課題



◀ 写真見本と同じビックルを箱に入れる課題



➡ 半分にカットされた野菜・果物の絵のカードを洗濯ばさみでつなぎ合わせる課題



◀ 台紙に印刷された色に合わせて、洗濯ばさみをつける課題



サポート事業とは

入所施設サポート

通所施設サポート

強度行動障がい支援の
まずはここ！

② わらしな学園 (社会福祉法人 静岡市厚生事業協会)

▶ わらしな学園のご紹介

わらしな学園は、2棟に分かれている建物の構造を生かし、年齢や性別ではなく、適性に応じた支援など共通するニーズに基づき暮らす場所を区別することで効率よく支援できるようにしています。



日中活動としては広々とした作業棟と、天井が高く窓の多い開放感があるプレイルームを利用して、作業訓練や美術・音楽などの創作活動の場を提供しています。また、体力づくりを兼ねて、同施設が立地する中山間地の自然豊かな静かな環境の中を散策することも、利用者の皆様の楽しみの一つです。そのほか、施設を会場にして行う盆踊りや運動会は、地域の方との大切なふれあいの場となっています。このようにわらしな学園では利用者目線に立ち、個人個人のペースを尊重した支援に心掛けています。

▶ わらしな学園 施設長より

静岡市厚生事業協会は、平成30年度より本事業に参加させていただき、この間、水野先生には数知れないご助言を賜りましたことを厚く感謝申し上げます。

わらしな学園は、長く静岡市の指定管理施設として運営してまいりました。近年は特に行動障がいの方のセーフティーネットの役割を担っておりますが、従来の療育指導の枠にはまらない特異な行動特性を示す利用者に対して、有効な支援方法がわからず試行錯誤を続けております。そのような時に静岡市担当課からの「強度行動障がい者支援施設等サポート事業」へのお誘いは、願ってもないチャンスでした。

そして3年経ち、新館の利用者への支援として始まったサポート事業から得た新たな取組は、現在本館利用者にも広がり、確かな手ごたえを感じ始めております。例えば、これまで栄養士が頭を痛めていた食器の破損が今ではめっきり減るなどその効果は確かなものとなってきております。食器の破損などは小さなことではありますが、このような小さなことでも彼らの自立を妨げる一因であることは明らかです。彼らが未来につながる大きな一歩を踏み出したことに施設長として大変喜んでおります。

結びに、本事業に関わる機会を与えてくださいました静岡市そして懇切丁寧にご指導いただきました水野先生には深く感謝申し上げます。今後におきましても、利用者の自立と生活の質の向上を目指して皆様と共に手を携えて歩んでいければ幸いです。

施設長 糟谷 幸伸

▶▶ 3年間の取組を振り返って

わらしな学園では近年、激しい行動障がいを伴う自閉症の方の入所が増え、当初は、自傷や他害、器物の破壊などの問題行動を目の当たりにし、支援員はどのように対応すべきかわからず試行錯誤していました。

自閉症支援については、かねてよりSPELL（構造化、積極アプローチ、共感、低刺激、連携を意味する英語頭文字）の方法論を学んでいましたが、総論的には理解できても具体的にはどのようなことを行っているのかわからず悩んでいました。ちょうどそのような時期に静岡市から「サポート事業」への参加のお誘いをいただきました。

この事業の講師である水野先生の構造化理論である「**フレームワークを活用した自閉症支援**」は、私たちにとって耳新しい言葉でしたが、これが自閉症支援へのアプローチのカギであろうということで、まずはプロジェクトチームによる試行から始めました。平成30年のことです。

サポート事業2年目 対象者Bさんへの支援を進めて

結果が出るようになったのは2年目の夏になってからでした。

実践の取組は、18ページ以降の『Bさんの構造化支援について』にまとめています。

私たちはBさんの観察を重ねることにより、Bさんが他害や破壊行為からパニックを起こしてしまうのは、**先の見通しがわからない不安が原因なのだろう**と仮説を立てました。しかし言葉ではなかなか伝わらないのも事実です。そこで言葉に代わる何かが必要と考えました。

さらに観察を続けると、Bさんがカレンダーに興味があること、チラシをみてハンバーガーを欲しがることがわかり、これらもヒントになるのではないかと考えました。

そこで、**言葉に代わる「言語」として、写真やイラスト、図形等の視覚情報を駆使したコミュニケーションをとることを**試みました。

具体的には日程を伝えるための**写真を使ったスケジュール表の作成、余分な刺激で気が散らないようにするためのパーテーション設置、自らやりたい余暇活動を選択できるチョイスボードの工夫、落ち着いて外出を楽しむための行程表の作成**などです。

この方法に手ごたえを感じた私たちは、安全面から、自室でしか食事がとれなかったBさんを食堂に誘ってみました。これについても綿密なスケジュール設計と、念のため必要最小限のパーテーションによる刺激遮断を伴いながらの試みです。するとBさんは、私たちの不安をよそにゆっくりとお食事を楽しみ、なんと食べ終わった食器までも実に丁寧に食器を洗うシンクに入れてくれるではないですか。かつてバンバンと食器を叩き壊しては泣き暴れていた姿はもうどこにもありません。

このように、水野先生が教えてくださった『**「フレームワークを活用した自閉症支援」** = 「いつ」「どこで」「何を」「どのようなやり方で」「どうなったら終わりののか」「終わったら次に何があるのか」という情報を、利用者の特性にあわせ、**整理して伝える方法**』が障がい者支援にとって非常に有効な手段であることを、私たちは具体的な事例を通して実感しています。

今後、この実践によって得られた成果を、他の利用者の皆様の支援に活かし、さらなる障がい者支援の向上を目指してまいります。

結びに、私たちを懇切丁寧に教え導いてくれた水野先生を始め、学習の機会や会場手配などの取り計らいをしていただいた静岡市の担当者様、誠にありがとうございました。

《サポート事業の様子》



▶▶ Bさん(20代男性 自閉症 強度行動障がい)の構造化支援について

Bさんの支援について、実際に構造化支援で作成し、使用したツールの一部を紹介します。

スケジュールボード

活動の見通しを視覚的に提示します。Bさんは写真の理解ができるため、写真カードを使い、確認し、活動を実施した後、裏返す形式を取っています。



チョイスボード(余暇)

スケジュールの中に余暇の選択カード(星形)を入れ、チョイスボードで自分の好きな余暇活動を選びます。「やりたくない」を示す×カードもあり、コミュニケーションツールとして使用しています。最初は四角いカードを使っていましたが、Bさんがスケジュールボードの写真カードと区別がつかなく混乱してしまったことがあり、○型に再構造化したところ、混乱がなくなりました。



1対1エリア

支援員と1対1で、アセスメントや新しい課題を実施する場所として設定しています。



自立エリア

支援員と1対1で課題などを実施し、できるようになったら、一人で自立して作業などを行う場所として設定しています。



ワークシステム ※6

一つの場所でいくつかの作業を行う際に使用しています。Bさんは記号のマッチング※7ができるため、ホワイトボードの記号（自立エリアの正面に設置）を見て、同じ記号の引き出しから自立課題を自分で出し作業をする形式を取っています。



自立課題 動物絵合わせ

動物の絵を並べて完成させる課題です。

- ① 一体型にし、視覚的に整理しています。置くカードにベルクロ※8と枠線をつけましたが、本人の中でカードの位置が定まらず、不穩になることが多く見られました。
- ② 再構造化し、本人が置くカードの場所はカットアウト※9にし、位置がずれないようにしたところ、この作業中の不穩は見られなくなりました。



また、絵を交替できるように、元のカードにはベルクロをつけ、パターンを変えられるようにも改善してあります。

自立課題 ビーズ並べ

写真見本のとおりビーズを並べる課題です。

- ① Bさんは写真見本で作業自体はできたのですが、ビーズの数が多すぎたこと、小さく掴みにくく落としやすいことから不穩になることが見られました。
- ② 再構造化し、視覚の整理のためプレートに一体型※10にし、ビーズを掴みやすく転がらないようにしたところ、不穩な状態がなくなりました。



※6 **ワークシステム** 取り組む一連の課題を視覚化し、示したもの。

※7 **記号のマッチング** マッチングは、その情報を元に同じものだと判断できること。Bさんは、記号の見分けがつき、同じ記号のものを探することができるため、ワークシステムに「記号」を使用している。

※8 **ベルクロ** 面ファスナーの一種。布に特殊な加工をし、面的に脱着可能なファスナー。よく知られる商標として、マジックテープがある。

※9 **カットアウト** 台紙にカードの形に切り込みを入れ、型はめパズルのようにぴったりはまるようにしたもの。

※10 **一体型** 材料や道具をその都度配置しなくてもいいよう、台紙やプレートに貼り付けた状態。この課題では、写真見本、ビーズ入れ、ビーズをはめる型を白いプレートに固定している。

自立課題 ストロー挿し

同じストローを穴に入れる課題です。

- ① 一体型にしましたが、ストローが入れやすいように、挿すケースを取り外し式にしたところ、ケースが外れることが逆に気になり不穩になることが多く、またストライプのストローでのマッチングが難しかったようで、作業自体がうまくいかない状態でした。
- ② 再構造化し、ケースを固定し、ストローの色をわかりやすくしたところ、不穩にならず作業ができるようになりました。



空き缶作業

他利用者と作業をしていく中で不穩な様子が見られたため、皆が作業する場所の中で、Bさんの作業場所を自立エリアにしました。また、作業工程を写真見本で示し、左の四角いボックスに入っている缶を潰し、右のカゴに入れる工程として、作業の終わりをわかりやすくしたところ、スムーズに作業ができるようになりました。



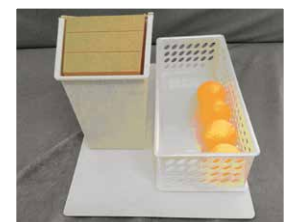
外出時のスケジュールボード

Bさんはハンバーガーが好きで、支援員とお店に外出する機会が増えてきたのですが、お店に着くまでの間に不穩になることが見られていました。そのため、道中の目立つ建物などの写真を行程表にし、その場所が見えたらカードを裏返す形にし、ゴールのお店までの行程がわかるように設定したところ、不安が少なくなったようで不穩も少なくなりました。



ウォーキングツール

Bさんはウォーキングが好きな様子なのですが、途中で不穩になってしまうことも多く見られました。あと何週歩くのか終わりが見えないことで不安を感じていると考え、園庭を一周回ったら、ピンポン玉を箱に入れていくツールを作り、ピンポン玉が無くなったら終わりとし、あとどれ位回るのが先の見通しと終わりをわかりやすくすることで、以前よりもウォーキングがスムーズにできるようになりました。



▶▶ コンサルタント 水野 敦之 氏より

こんなことを言うのは適切ではないかもしれませんが、最初わらしな学園さんにコンサルテーションに入った際、強度行動障がいの厳しい状況を見て、何から始めていけばいいのか茫然としてしまいました。

しかし、わらしな学園さんの良いところは、こちらが提示した課題に真摯に取り組むことでした。コンサルテーションの時に毎回、こちらがスーパーバイズをすると休憩時間にはすでに現場でどうするかディスカッションをされるのです。今回の実践資料を見てもコンサルテーションを通してアセスメントを細かく丁寧にされ、うまくいかない部分があっても調整しながら進めることで、小さな成功体験を支援者も利用者も積み重ねてられました。

今後も、すごく見栄えの良いアイデアや大きな変化を求めるのではなく、1つ1つを丁寧に実践されるといいかなと思います。